様式８

令和４年度

横浜市立高等学校

自己評価書

横浜市立桜丘高等学校

＜学校情報＞

1　課程・学科　全日制課程・普通科

2　学校長　星　野　浩　（令和４年４月１日現在　在職３年目）

3　学校教育目標

知育、徳育、体育の調和的な伸長を図る

（１）進学指導重点校として、潜在能力を開発し、高い学力を育てる。
（２）自主自立の精神を重んじ、個性と能力を伸ばし、創造力と実践力を養う。
（３）心身の健やかな成長を促し、規範意識や倫理観のある情操豊かな人間性を養う。

4　教育方針

（１）日々の授業実践を通して、自ら学ぼうとする意欲を喚起し、考える力を伸長させ、高い学力を育成する。
（２）キャリアガイダンス機能を充実させ、将来、社会人・職業人として自立していくために必要な社会人基礎力を育成する。
（３）特別活動、総合的な学習の時間、社会体験活動、地域連携活動、探究的な学習などを通して、豊かな人間性や社会性を育成する。

5　教職員数（令和４年 12 月１日現在）

学校長	1	校長代理	0	副校長	2	事務長	1
教諭	62	（男 40 女 22）				養護教諭	2
実習助手	1			事務職員	3	技能職員	3
ＡＥＴ	2			非常勤講師	5	管理員	0

6　生徒在籍数（令和４年 12 月１日現在）

年次（学年）	学級数	男　子	女　子	合　計
1	8	146	172	318
2	8	157	150	307
3	8	138	174	312
合　計	24	441	496	937

7　回収率

		依頼数	回答数	回収率
教職員		62	62	100.0%
生徒	１年	318	256	80.5%
	２年	309	234	75.7%
	３年	312	221	70.8%
	合　計	939	711	75.7%
保護者		939	711	75.7%

8　自己評価実施日

教職員	令和４年 10 月 28 日～令和４年 11 月 11 日
生徒	令和４年 11 月 7 日～令和４年 11 月 18 日
保護者	令和４年 10 月 28 日～令和４年 11 月 11 日

9　集計・分析期間

令和４年 12 月 25 日～令和５年２月 10 日

10　自己評価書の公表方法・時期

令和５年５月末に学校 Web ページにて公表予定。

＜自己評価＞

1　第３期横浜市教育振興基本計画の推進状況

■魅力ある高校教育の推進状況

（関連アンケート番号：教職員 1、保護者 1）

管理職

取　組	・第３期横浜市教育振興基本計画(2018-2022)に定められている、魅力ある高校教育の推進、グローバル化への対応をめざした。「英語力の向上と国際交流活動の推進」のために「ドイツ国際交流プログラム」の担当者で今後の連携に関して協議をすすめた。フランクフルト姉妹校への生徒派遣は再開へ向けて相手校担当者と協議を重ねている。オーストラリアの教育関係者と連携をはかり、オンライン上での国際交流活動を実施。さらなる発展を模索している。進学指導重点校として、授業力向上と生徒の希望進路実現を目指した。
成　果	・保護者の評価項目「１進学指導重点校としての取組が十分に行われていると思いますか」では、肯定的回答が 76.0%（集計表 11 ページ）となっている。また教職員の評価項目「1『魅力ある高校教育の推進』に向けて学校全体として取り組んでいる」では、肯定的回答が 87.7%（集計表１ページ）となっており、それぞれ高い評価を維持している。このことから、さらに学校全体で授業改善に取組み、進路相談において進路指導部・担任を中心とした教員と生徒が十分に進路を意識した取り組みを継続しているといえる。
課　題	・「ドイツ国際交流プログラム」は、ドイツへ派遣・受け入れ共に断念せざるをえないことになった。しかし、国際理解教育を充実させるべく、再開へ向けて協議を重ねている。また、オンラインでのドイツ、オーストラリア交流などできることを一つ一つ積み重ね、工夫を施しより充実した体験・活動になるよう努力する必要がある。そのことが、本校の特色ある取組の一つとして定着させる礎となると考える。 ・令和５年度は新学習指導要領への移行２年目であるとともに、「教員養成講座」開設もある。普通科高校の特色づくりへ向け「魅力ある高校教育の推進」を学校全体として取り組むことが重要である。
改善策	・教職員が、学校全体としての新たな取り組みや進学指導重点校としての使命を理解し、丁寧に情報を共有しながらチームとして取り組んでいくことが重要である。 ・保護者からの本校の取り組みが評価されるように、「学校グランドデザイン」を基盤としたカリキュラム等を生徒・保護者・地域に学校の取り組みを理解してもらう積極的な広報活動が必要である。

2　教育活動の状況

（１）各教科の状況

□教育課程の状況

（関連アンケート番号：教職員 2,3、生徒 1、保護者 2、授業評価 9）

管理職、教育課程委員会

取　組	・教育課程の運営・検証および課題の検討・改善にあたった。 ・新学習指導要領改訂に対応した教育課程の編成について、予想される問題点についての分析や研究を行い、選択科目・講座数などの検討を行った。
成　果	・生徒の学校評価１．「希望する進路に進むために必要な科目や興味・関心を満たす科目が設定されていますか。」について「そう思う」43.6%・「ややそう思う」44.8%と高くなっている。教育課程について、今まで様々な検討を重ねて改善を行ってきた成果が出ていると思われる。また、選択科目指導の際に、教員からのしっかりとした説明とアドバイスができたこともこの高評価につながっている。 ・保護者の学校評価２．「本校の教育課程は、生徒の進路実現や適性に応じたものとなっていると思いますか。」について「そう思う」27.2%・「ややそう思う」52.8%となっている。高い満足度を得られている。 生徒の学校評価１．「希望する進路に進むために必要な科目や興味・関心を満たす科目が設定されていますか。」について「そう思う」43.6%・「ややそう思う」44.8%と肯定的評価である。令和３年度の保護者の学校評価２．は「そう思う」26.2%・「ややそう思う」51.8%であり、概ね令和４年度が高くなっている。さらに保護者に対しての説明等を十分かつ丁寧に行った影響であろう。
課　題	・現在の教育課程と新教育課程が令和４年度から並行して動き出しており、生徒および保護者に向けたより丁寧な説明や進路実現に向けた生徒の希望の把握、適切な進路指導を続けていくこと、新教育課程の検討を行い、調整・変更および新たな問題点の洗い出していくことが課題である。
改善策	・現在の教育課程と新教育課程が令和４年度から並行して動いており、生徒および保護者に向けたより丁寧な説明や進路実現に向けた生徒の希望の把握、適切な進路指導を継続的に行っていく。さらに新教育課程の検討を行い、教育課程全体の調整・変更や新たな問題点を洗い出して検討して修正をしていく。 ・各教科での授業改善や選択科目指導なども引き続き丁寧に行っていく。

■教科指導の状況
（関連アンケート番号：教職員 4,5,6、生徒授業評価 1～15）

国語科

取　組	・国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高め、思考力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。 ・国際社会、地域社会の一員として、課題解決に向けた論理的思考力と表現力を育てる。さらに、幅広い読書活動を通して、感受性と想像力を養い、生涯にわたって豊かな人間性をはぐくむ態度を育てる。 ・日常から教科内で情報を共有しながら授業や学習内容について研究を深め、進学指導重点校として生徒の学習活動がより良いものとなるように、担当者間で連携を図りながら指導に取り組んだ。 ・新課程科目「現代の国語」、「言語文化」の適切な指導法や研究に取り組み、現代社会において求められる国語力の伸長と定着を図る。
成　果	・アンケートの各問いに対し、「そう思う」と「ややそう思う」と答えた生徒の割合の合計を見ると、「自分自身について」の「１学習意欲」を除いて 80%以上となっている。 ・学習内容の精選、学習内容に応じた授業形態と授業展開の工夫、学習プリントの活用などに、教科全体として継続的に取り組んできたことが評価の向上につながったと思われる。 ・特に授業や担当教員・授業内容では「そう思う」「ややそう思う」の合計は、90%前後の数値になっている。これは上記の「取組」にあるように日常から教員間での教材に関する情報共有が行われた結果が反映されたものであると思われる。
課　題	・「そう思う」と「ややそう思う」の割合が、教員に関する問い４～15 では 90%前後の評価となっているものの、「自分自身について」の項目で特に「1 学習意欲」では、75.4%と他の問いに比べて低くなっている。また、例年では「2 理解度」「3 参加態度」においても低くなる傾向があったが、今年度はどちらも改善が見られた。 ・今年度も前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策により、話し合い活動やグループ学習などの学習形態は十分にとることができなかった。その結果、生徒にとっては単調な座学が中心とならざるを得ず、授業に対する参加態度の低迷に影響したものと考えられる。何よりも生徒の学習意欲の向上を目指し、魅力的な教材の提供、授業内容の向上につとめることが今後の課題であろう。

改善策	・生徒の興味や関心を高めるべく、学習内容や使用教材の精選、生徒の実態に即した適切な学習計画の作成、授業展開や授業形態の工夫、指導技術の向上に取り組む。 ・コロナ渦における「生徒が自主的に意見交換できる場」の在り方に対する工夫が求められる。 ・継続的な小テストの実施や学習プリントの活用などによって、学習内容の定着を図るとともに、生徒の学習状況の把握に努め、特に理解が不足している生徒に対しては、学習方法改善に対する助言、学習課題の活用、補習の実施などによって学習活動を支援する。これらの教育活動を通じて、生徒の自ら学び、自ら課題を解決する姿勢を養いたい。 ・新課程科目の教育内容、指導法、評価については、教科会を利用して共通理解を図り、令和５年度開始の２年次各科目についても充実した教育内容となるよう努めていきたい。

■教科指導の状況
（関連アンケート番号：教職員 4,5,6、生徒授業評価 1～15）

地歴公民科

取　組	・地歴公民科では、週一回の教科会において、科目の担当者ごとに授業進度および内容の打ち合わせをおこない、教材や情報の共有をはかりながら、授業研究をすすめてきた。 ・定期試験の範囲は科目間で共通認識を持ちながら、試験範囲の確認や問題の中身まで検討して、生徒にとって適する問題作成に力を注いできた。
成　果	・生徒の授業評価において、「授業や先生について」の質問項目においては、すべての項目でおおむね高い評価を得た。また、「授業内容について」も同様に評価を得ている。指導技術の質問項目では、他項目にくらべて多少評価が下がったが、前年度よりも大幅に改善している。引き続き、板書やプリントの活用、思考力を試す場面、活動的な場面に対しての工夫につとめていきたい。 ・教科会で授業の様子について情報の共有を続けると共に、生徒に対して丁寧な指導を続けていることは、上記の評価に如実に現れているといえる。
課　題	・生徒の「自分自身について」の質問項目では、各科目通じて学習意欲の低い生徒が一定数存在する傾向を示しているが、他教科のように宿題を頻繁に出すことが少ないために日常的な予習復習の習慣が定着していないことをもって、意欲を向けていないと回答する場合があると考えている。授業中の取組みの様子からは教科・科目に対する意欲は標準的に「ある」と捉えられる。 ・授業内容についての質問で「学力がつく授業・指導になっている」「速さは適切である」の項目において否定的な回答（10.7%・8.6%）が少数ながらみられた。
改善策	・学習内容の深まりを担保しつつ、思考・活動する場面を設けてさらに授業速度を適切に維持する授業実践を令和５年度以降も模索する。 ・教科内における話し合いを大切にして、生徒がより効果的な学習を生み出すことができるよう、授業改善をめざしていく。

■教科指導の状況
（関連アンケート番号：教職員 4,5,6、生徒授業評価 1～15）

数学科

取　組	・進学指導重点校として、数学における基本的な概念や原理・法則の体系的な理解を深め、事象を数学的に考察し表現する能力を育て高い学力を身につけさせるために、基礎から応用問題や発展的学習まで幅広い授業を心がけた。 ・各科目の指導において、学力がしっかりと定着するように、週末課題や小テストの実施、机間支援など常に生徒の状況を掌握するように努めた。また、補習が必要な生徒に対して課外補習の実施や、希望する生徒に対して、試験前の放課後や長期休業中等に時間を掛けて講習を実施するなど対応を積極的に行い、基礎学力の向上に努めた。 ・指導内容に関しての教員間の情報交換も、週に 1 回の教科打合せを実施し、指導水準や進度を確認、長期休業中などは学年毎に統一した課題を用意し、指導の偏りをなくすように努力した。授業見学週間内に限らず、お互いの授業を見学し合いながらの授業改善にも取り組んでいる。ICT 機器も活用しながら授業改善にも取り組んでいる。
成　果	・自分自身についての項目で、数学の授業内容を理解できていないとした生徒が令和 2 年度は 23.2%、令和 3 年度は 14.3%、令和 4 年度は 15.9%とまずまずの結果を得た。84%以上の生徒は学習内容が理解できている。 ・授業や先生についての項目で、学習評価及び学習計画については令和 3 年度では 96.8%、95.4%、令和 4 年度では 96.0%、96.4%と高水準を保っている。これは、教科内で教員間の連携を密にし、年度当初に説明した計画通りに授業を進め、公正公平に評価していることを示している。 ・授業内容の項目で、「力がつく授業になっている」「理解を深める授業になっている」としている生徒はそれぞれ、令和 3 年度は 91.4%、90.6%、令和 4 年度は 91.2%、91.4%と高水準を保っている。 ・学習水準を高めに設定しており、教科として授業改善に取り組んでいる。それが現れており、授業評価の結果は納得できる。

課　題	・数学という教科の特性から、学習内容が中学からかなり難化する高校では、学習意欲が低下する生徒が多くなる傾向があるが、上でも述べたが授業内容を理解できていないとした生徒は減少傾向にある。ただ、数学の学習に対して苦手意識をもっている生徒は多く、学力はありながら自信を持てないでいる生徒もいる。学年全体として指導するなどケアをしつつ生徒にもっと自信をつけさせるような助言を与えていくこと課題である。また、生徒がより主体的に学習していくために、教員間で授業力向上に向けた研修・研究を重ねていく。さらにその情報交換を進めていく中で授業展開や、教材の難易度、問題量などより成果を上げる方法などの工夫・検討は引き続きしていく必要がある。
改善策	・「わかる」ことと「できる」ことは異なり、分かってもそれができるようになり、かつ、さらにそれが定着することとは別のことである。生徒が主体的に学習する中でより多くの「わかった」をより多くの「できた」に変え、成功体験を多く実感させ、定着させていく取り組みが必要になってくる。しかし、ただ易しい課題に取り組ませるのではなく、指導水準を低下させることなく、丁寧なきめ細かい指導と授業の雰囲気作り、適切な教材、ICT 活用、適切な評価は大切であり、授業デザインの工夫と内容の規準の統一を教科会等で確認しながら継続的に授業改善を進めていかなければならない。

■教科指導の状況
（関連アンケート番号：教職員 4,5,6、生徒授業評価 1～15）

理科

取　組	・自然の事物・現象に対する関心や探究心を高め，目的意識をもって観察・実験などを行い、科学的に探究する能力と態度を育てるとともに、自然の事物・現象についての理解を深めることをおこなった。 ・また、科学的な自然観を育成し、飛躍的に発展する先端科学技術への興味・関心を高めるとともに，生命を尊重し，自然環境の保全に寄与する態度を育成する取り組みをおこなった。 ・令和４年度の取り組みでは、コロナ禍であるが、感染予防対策を講じた上で昨年度よりは実験を取り入れることができた。また、感染予防対策で登校できない生徒に対しては、Google meet を利用した授業の同時配信や、動画を作成して配信するなどの対応をした。 ・授業内容の理解が低い生徒に対して、適宜補習を行い、遅れを補う工夫を行った。 ・アクティブラーニングの場面でも、集団を小さくし、さらに対面した会話を避けるなどして実施した。
成　果	・前述の「取組」によって、「授業内容について」は、授業時間の項目で「そう思う」と「ややそう思う」の合計が 90%を切ったものの、それ以外の理解度や指導技術などすべての項目、さらには「授業や先生について」のすべての項目で「そう思う」と「ややそう思う」の合計は 90%を超え、肯定的な回答が多かった。 ・生徒のアンケート結果を見ると、自身の学習意欲以外は、肯定的な意見が 80%を超え、例年同様高い数値となっている。
課　題	・令和４年度の生徒アンケートデータで肯定的な意見が低かったのが「自分自身について」の学習意欲で 72%の低い値となった。理科では現象を、数式や記号を用いて表現することが多く、数学に対して苦手感覚をもつ生徒の中には、科学本来の学問的魅力に到達する前段階で学習を諦めてしまう生徒も少なくない。また、授業中の質問対応や授業後のフォローが出来なかったことなどで、ついていけない、苦手意識を持つ生徒が出てきているので、引き続き学習意欲の向上を目指した授業改善の取り組みや補習などのフォロー体制を構築していく必要がある。 ・理科に対する学習習慣がないことも考えられるので、他教科とのバランスも考えながら、授業で扱った学習内容の復習ができるような宿題を出すことによって、理科の内容に触れている時間を増やすことも課題である。

改善策	・モチベーションの低下については、身近で具体的な話題の提供など、興味を持たせ、社会との関連から今の学びの延長にある将来のビジョンを持たせていく。数学の授業進捗に関する情報交換も教員間で密に行うようにし、数学的困難さを感じている生徒へのケアを実践する。また、夏期講習を含めた補習ならびに定期試験後の補習を必要に応じて行い、授業内容の理解を深め、科学的な事象に興味が持てるように指導する。

■教科指導の状況
（関連アンケート番号：教職員 4,5,6、生徒授業評価 1～15）

外国語科（英語科）

取　組	・英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すると共に、情報や考えなどを的確に理解したり、適切に伝えたりする能力を養う。 （具体的な取り組み） ・ＬＬ教室を活用し、能動的発表活動を踏まえた授業展開 ・ＩＣＴを積極的に利用し、視覚情報、音声情報などを取り入れた授業（展開） ・ＡＬＴとのティーム・テーチィング゛を充実させ、生徒が英語で自己表現やコミュニケーションを図ろうとする意欲と態度を養う。 ・意欲のある生徒および学習遅延者に対する指導の充実 ・外部検定試験対策の充実と大学入試対策としての補習強化 ・生徒が主体的・能動的に学習に取り組むことができる指導法の研究 ・新カリキュラムの観点別評価への研究および対応
成　果	・生徒評価項目「７．公平であり、生徒を理解しようしているため安心して質問などができる。(生徒理解)」、「10．発問や説明は適切である。(指導技術)」及び「５．学習のねらいに沿った適切な学習内容であり、内容の組み立ても適切である。(学習内容)」の数値が、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせてそれぞれ項目７は92%、項目10は93.3%、項目５は91%以上と高い評価になっており、学習環境作り、授業の構成や指導法の工夫、生徒主体の授業等、教員のひとりひとりの取り組みの成果が生徒からの評価につながったと考えられる。 ・授業や先生についての項目や授業内容についてもすべての評価項目において「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると85%以上であり、授業展開、評価の妥当性等、教員の取り組みが機能している成果と考えたい。

課　題	・生徒評価項目「１学習意欲」の「あまりそう思わない」「そう思わない」をあわせると 20%であり、令和３年度と同様、一定数の生徒が学習意欲に課題を持っていることがわかる。また、「２理解度」の「あまりそう思わない」「そう思わない」をあわせると令和３年度同様に 13.7%であった。授業に積極的に参加しようという意欲は若干かけるものの、ある程度授業の内容を理解できていると考える生徒がいると思われる。授業だけでなく、授業の課題を自主的な学習への取り組みにつなげ、意欲と理解両方の向上を促していくことが課題である。そのため、動機づけを大切にし、自立した学習者を育てる視点に立ち、生徒に目標を持たせ、自己実現を支えていくことが今後も必要である。
改善策	・生徒の意欲向上と学力向上を図るため、教材の導入、ＩＣＴ活用の工夫、指導方法の研究などへ積極的に取り組み、教員間の情報共有を密にしながら授業実践を行っていく。また、個々の教員が自己の英語力の向上に努め、多彩な題材を生かすための教養を深めることで、質の高い、工夫した授業展開ができるよう日々研鑽を積む。また、生徒の進路実現に向け、変化の多い入試にも対応できるよう、引き続き教材研究に努め、生徒の英語力を伸ばしていきたい。

■教科指導の状況
（関連アンケート番号：教職員 4,5,6、生徒授業評価 1～15）

保健体育科

取　組	・教師間の連携や他の市立高校との情報交換を行い、集団や状況に応じた授業内容と学習展開について常に研修を行い、変化する生徒の実態に即した指導を行うことを心掛けている。 ・目標の実現に向けて教師間で共通理解を図り学習指導計画を立てている。
成　果	・各学年とも「生徒の授業評価項目」では全項目においてほぼ 90%を超える数値の肯定的回答が得られており、取組みの成果が表れていると考えられる。 ・75 期体育や 76 期保健については、総ての項目において「そう思う」との回答が年次進行で増加しており、取り組みの成果が表れていると考えられる。 ・77 期保健については、ほとんどの項目において肯定的回答が過去 3 年間の中で最も高い数値を示している。
課　題	・76 期体育は 1 年時に比べて「そう思う」との回答率が減少し、肯定的回答が若干減少してしまっている。 ・77 期体育の「自分自身の取り組み」に対する肯定的評価の割合は、例年に比べて低い数値になっている。 ・評価評定においては観点別評価の研究を継続する必要がある。
改善策	・新学習指導要領での学習評価を中学で経験している生徒が年次進行で入学してくる中で、違和感を覚えないよう丁寧な説明を心掛ける。 ・純粋に体を動かすことの楽しさ・爽快感、仲間との共同することの楽しさを学習の中で体験させ、集団の学習意欲の向上につなげる。 ・自分自身の心身の状態に目を向けさせ、他との関係に気づかせ健康への関心を高める。

■教科指導の状況
（関連アンケート番号：教職員 4,5,6、生徒授業評価 1～15）

芸術科

取　組	・芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、芸術の魅力を発信できる力を育てる。 ・創作活動、表現活動、鑑賞活動を通して、世界の多様な芸術文化を理解し尊重するとともに、我が国の文化や伝統を大切にし、芸術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。 ・芸術科として、各生徒の進路実現へ向けた適切な指導、多様な進路の紹介や相談の窓口としての機能を果たすよう、教科会で意識のすり合わせをしながら指導に取り組む。
成　果	・芸術科では、評価項目の全ての項目で「そう思う」「ややそう思う」が 90%を上回る回答を得ている。これは芸術科の授業展開として音楽美術書道と 3 分割で展開し、生徒が自身の興味関心に合わせて選択した上での履修となっているためと考えられる。また、授業や先生についての評価項目では、ほぼ全ての項目で 95%以上の高い評価を得た。これは年間を通して教科会の中で音楽美術書道の 3 科目の教師が連携を取り合い、高いモチベーションの保ち、日々の授業に取り組めたことの成果だと言える。
課　題	・自分自身についての評価項目 2「理解度」における「そう思う」の回答が 44.9%となっており、自身の理解度について他の項目と比べれば自信のない生徒が一定数いることを示している。 ・授業内容についての評価項目 11「授業時間」における「あまりそう思わない」「そう思わない」の回答が 7.5%となっており、授業時間について不満を感じている生徒がいることが分かる。活動に関する準備や片付けにかかる時間を明確にし、授業終了時刻を上回らないように注意しながら授業を進める必要がある。
改善策	・各生徒の能力に応じた授業展開を心掛け、小さな成功体験を積み重ねさせることで芸術に対する苦手意識を持つ生徒のやる気を引き出し、積極的に授業に参加できるような雰囲気づくりを意識して日々の指導に取り組む。 ・授業中の生徒の表現活動を細かく観察し、授業内容を理解しているのかどうかに重点をおいて評価をし、生徒の授業内容の理解度を高める。 ・全ての授業において、表現の分野と鑑賞の分野が表裏一体となった、現実生活に即した深い学びのある授業を展開していく。

■教科指導の状況
（関連アンケート番号：教職員 4,5,6、生徒授業評価 1～15）

家庭科

取　組	・家庭科では、生徒たちが将来、様々な分野での指導者として、社会で高い能力を発揮し、活躍できるためにも、生活に必要な技術力を高め、創意・工夫できる思考を身につけることを目標に授業に取り組んでいる。そのため、生徒に家で調べる課題を与え、家族間で話し合ったり、班で意見交換をする等、人の意見を聞ける機会を多くし、自分の考えを深めた上で、必要な知識を育成していけるような授業を目指している。 ３年の選択科目は、興味関心の深い生徒が選択しているので、授業の取り組みは、より高い技術と能力を身につけることを目指している。
成　果	・３年の選択科目「フードデザイン」「子どもの発達と保育」では、興味関心をもって取り組む生徒が多く、非常に高い評価となっている。 レポートの内容は、優れており、提出率も良く、実習でも高い技術力を身につけようと熱心に取り組む姿勢が高いためである。 ・２年の共通履修科目「家庭基礎」は、選択科目ほどではないが、ほぼ満足できる高い評価を得ることができた。これは、クラスを２分割して授業をおこなっていることが大きい。 特に、被服の製作では、年々、技術力が低下している生徒が増えている現状がある。そこで、一人一人に対応していけるこの体制は、とても効果が高い。また、調理実習やグループでの話し合いや発表等に対して、きめ細かい指導ができていることが、評価の高さに結びついている。
課　題	「家庭基礎」の調理実習では、コロナ対応で班編成を２～３名と少人数にして、分担を極力避け、自分のものは自分で作るようにした。これにより実習の効果が高まった。また、感染リスクの高い試食は実施せず、昼食時に食べるか、自宅に持ち帰って食べるようにした。作り立ての温かい状態で試食させられなかったのは残念ではあったが、コロナ禍前と同様に４回の実習を実施できたのでよかった。また、家庭での話題提供に役立ったようで、この点も良かった。 　コロナに対する規制が緩やかになるようであるが、来年度も十分に感染対策をしたうえで、実習・実験やグループワークに取り組ませることができるのかが課題である。 　コロナ関連で授業を休まざるを得なかった生徒がそれなりの人数いたが、登校時に授業内容を聞きに来ない等、サポート体制が課題である。

改善策	・家庭基礎の調理実習に関しては、今後も、各自が自分のものをつくるという体制で実施していきたい。このため、調理器具等の更新が必要で、徐々に行っていきたい。 ・課題のレポートに対する取り組みや授業中の居残りに関しては、本人に根気強く声をかけたい。

■教科指導の状況
（関連アンケート番号：教職員 4,5,6、生徒授業評価 1～15）

情報科

取　組	・教材を精選し、常に新しい話題・内容を取り入れられるようにしておく。生徒が自分で考え問題解決をし、理解を深めることができる授業を行うために、今まで以上に生徒同士が話し合いをする時間を増やして、生徒が意欲的に取り組むことができるような、能動的に学ぶ授業の組み立てを考えていく。またＴＴで進めていく授業形態をさらに有効活用して、生徒の活動をより細やかに観察し、アドバイスをしたり、また生徒からの質問を受けやすくすることで、生徒の理解を深める授業を行っていく。
成　果	・生徒の授業評価項目「５　学習のねらいに沿った適切な学習内容であり内容の組み立ても適切である」の数値で「そう思う」と「ややそう思う」をあわせて 71.5%(集計表 41 ページ)となっている。プリントの内容を変更して、教科書等を使いながら学習内容を選び、生徒が興味を持ちやすい身近な事例を取り上げたりして授業内容を変更した結果である。 ・生徒の授業評価項目「６　板書、プリント、教材の使い方は適切で効果的であり学習を推進する」の数値で「そう思う」と「ややそう思う」をあわせて 75.6%(集計表 41 ページ)となっている。授業で生徒が理解しやすいようにプリントや説明用の教材を工夫して作成したことがこの結果につながっているのではないか。 ・生徒の授業評価項目「10　発問や説明は適切である（指導技術）」の数値で「そう思う」と「ややそう思う」をあわせて 73.9%（集計表 41 ページ）という数値を得た。こちらの項目も授業改善の研究の結果、授業内容の工夫と教科書と併用しながら授業を進めたことなどがこの結果として現れた。さらなる向上に努めたい。 ・新型コロナ感染症対策のため授業の予定を大幅に変更したが、生徒も対応して、しっかりと学習に励んでいた。

課　題	・生徒の授業評価項目「２　授業で学習した内容はだいたい理解または習得できている」の数値で「そう思う」の数値が 18.6%(集計表 41 ページ)と令和３年度と比較すると数値は低くなった。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると、この項目は 65.3%(集計表 41 ページ)となっているので「そう思う」の割合を増やすために、さらに授業改善を図り、より確実に生徒の理解度を向上させるかが課題である。 ・生徒の授業評価項目「13 理解を深める授業になっている」の数値で「そう思う」の数値が令和３年度と比較してこの数値も下がっており、24.7%(集計表 41 ページ)となってしまった。令和３年度は「社会と情報」という科目で、内容も変更になっており単純に数値の比較はできないが、生徒に理解を深めるために授業の改善を図る必要がある。 この項目は生徒の授業評価項目「２　授業で学習した内容はだいたい理解または習得できている」との関連が高いと思われる。したがってより一層の授業研究をして行く必要である。 ・生徒の授業評価項目「７　公平であり、生徒を理解しようとしているため安心して質問などができると思いますか」の数値で「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると、この項目は 58.8%(集計表 41 ページ)となっておりかなり低い数値となっている。令和３年度はこの数値は「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると 93.4%あった。こちらが全体に質問を投げかけても答えが返ってこない場面が多く、個人を指名して質問を投げかけるなどして、答えやすくするなどの工夫が必要であり、もう少し質問の方法を考えていく必要がある。また授業終了時にはすぐに次の授業準備をしなければならず、そのため質問を受ける時間が短くなってしまっているのは事実であるので、生徒も質問しにくくなってしまっているのではないか。 ・全体的に令和３年度と比較して好意的な数値が低くなっている。生徒が理解を深められるようにさらに授業を改善していく必要がある。
改善策	・教材を精選し、常に新しい話題・内容を取り入れられるようにしておく。生徒が自分で考え問題解決をし、理解を深めることができる授業を行うために、今まで以上に生徒同士が話し合いをする時間を増やしたり、自分で取り組む時間を増やすなど生徒が意欲的に取り組むことができるような、能動的に学ぶ授業の組み立てを考えていく。教科横断的な内容もかなり増えている。特に数学科との連携が必要であると思われる。またＴＴで進めていく授業形態をさらに有効活用して、生徒の活動をより細やかに観察し、アドバイスをしたり、また生徒からの質問を受けやすくすることで、生徒の理解を深める授業を行っていく。

■総合的探究の時間
（生徒学校評価 9）

桜 ESD

取　組	・課題発見力、論理的思考力、表現・発信力、連携力を身に付けさせるために探究活動を行った。 ・１，２学年ともに個人でテーマの設定、探究方法の決定と実行、結果のまとめと発表活動を行わせた。課題発見力、論理的思考力、表現・発信力については個人の活動や発表で、また、連携力についてはテーマ設定や中間発表において生徒間でアドバイスさせることで、それぞれ育成を図った。 ・令和３年度導入した探究の手引きと記録を兼ね備えたサマリーノートに改良を加え 1、２学年に導入し、作業の進捗をノートのやり取りで確認できるようにした。
成　果	「主体的に考え、行動し、課題解決ができるようになった。」の質問項目について、3 学年全体では、「そう思う」「ややそう思う」を合わせた肯定的な回答が 81%、を超え、令和３年度との比較では微増となった。特に 2 年目の探究活動となった 2 学年で肯定的な回答が多く、１学年、3 学年と続いた。教員の積極的な働きかけもあり、苦労しながらも熱心に取り組む生徒が多く見られた。
課　題	探究活動そのものに対するモチベーションの低い生徒、発表やプレゼンテーションが苦手なことによって探究活動に積極的になれない生徒が見られることが課題である。モチベーションをあげていくための工夫が必要となる。答えの出ない問題に取り組むことの難しさと、答えや結果が出なくとも、その課題解決にいたる道のりにおける取組みが評価されることの両方を学ばせたい。
改善策	・身近で具体的な話題を提供するなど、より興味を持たせる工夫をする。テーマ設定時のフォローを厚くし、教員が全て教えるのではなく、課題解決の手段について相談にのる形を確立していく。また、将来の大学での研究が高校での探究活動の延長にあるという、進路指導と連動した指導を行っていく。 ・より効果的な指導ができるように指導グループを再検討するとともに、職員研修会を設け、無理なく指導できるように探究活動のサイクルや効果的なアドバイスの方法などを職員にも浸透させていく。

□特別活動・部活動の状況

（関連アンケート番号：教職員 7,8、生徒 3,10、保護者 4　）

生徒会指導部

取　組	・活動を通して生徒の自主的、実践的な態度の育成を目指す。 ・行事を通して、仲間と協力することの大切さを学び、学校生活の充実を図る。 ・部活動をとおして、生徒の自主的精神を育み、個性の伸長と人格の形成を図る。
成　果	・コロナウィルス感染拡大にともない、部活動の活動時間や学校行事での実施制限、活動時間の縮小などがある中でも生徒がよく考え、積極的に活動していた。また、修学旅行の実施、文化祭では保護者への公開ができたことで、「本校の学校行事や生徒会活動は充実し、お子さんは積極的に参加していると思いますか。」の質問に対してそう思うの回答が上がったと感じている。
課　題	・生徒アンケートの「あなたは生徒会活動や委員会活動を主体的に活動していますか。」「あなたは本校の生徒であることに誇りを感じていますか。」の回答で、そう思う、ややそう思うの数値が 80%程度のため、生徒の意識改革をしていきたい。
改善策	・少しづつではあるが、通常の行事や部活動ができるようになってきている。各委員会活動等での 1･2･3 学年でのつながりや部活動を通して桜高生としての自覚、あるべき姿を浸透していきたい。

２教育活動の状況

（２）生徒の状況

□生徒指導・教育相談の状況

（関連アンケート番号：教職員 9、生徒 2,4,5、保護者 5）

生活保健部

取　組	・生徒の基本的生活習慣の定着と規範意識の醸成を目指すため、学級や学年はもとより様々な場面で、学校生活における諸課題に対して注意喚起をおこない、指導してきた。 ・４月・10 月に遅刻指導週間、６月・11 月に下校指導週間を設けて、職員全体で指導をおこなった。 ・令和４年度も新型コロナ禍で全校生徒を集合させることができないため、従来の防災訓練に換えて防火・防災の意識づけ・避難経路の確認等を工夫しておこなった。 ・生徒ロッカーの施錠など、貴重品の自己管理の徹底を強く呼びかけた。 ・バス乗車時のマナーや通学時の歩き方などについて担任を通じて指導を徹底するとともに、痴漢等迷惑行為の被害については警察署と連携して迅速な対応をとった。 ・月間の生活目標・いじめ防止標語を月初めに教室掲示して、意識の高揚と啓蒙をはかった。 ・学校不適応を引き起こしている生徒に対しては、いじめ防止対策委員会および学年・教科担当・管理職と連携して、配慮や支援について検討した。保健室やスクールカウンセラーからも情報を得て参考とした。 ・配慮や支援を必要としている生徒については、特別支援委員会を中心に情報交換・情報共有を行い共通理解のもとに指導を行えるようにした。 ・スクールカウンセラーによる相談を年間 210 時間とり、生徒だけでなく保護者・教職員も相談できるようにした。

成　果	・教職員による学校評価項目「9 生徒の生活習慣の確立や規範意識の形成に向けて適切な指導をおこなうことができている」について、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると、令和４年度は 81.6%の数値であった。保護者による学校評価項目「5 生活習慣や規範意識を身につけるための適切な指導がおこなわれていると思いますか」について、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると令和４年度は 80.8%であった。教職員・保護者の回答がともに８割強の数値を示していて、学校・教職員の生活習慣の定着や規範意識の醸成に向けての指導が、一定の評価を得ていると考える。クラス・学年での取り組みに加え、生活保健部と全職員が協力して指導にあたることにより、さらに快適に安心して高校生活をおくれる安全な学校であるよう、環境を整えていくことに努めていきたい。 ・生徒による学校評価項目「2 あなたはホームルームで良好な人間関係を築くことができていますか」について、３学年全体で「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると 93.7%、同じく「4 先生はあなたの不安や悩み事などに親身になって相談にのっていますか」について、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると 89.0%となった。大方の生徒は良好な人間関係を築き、安心かつ安全で落ち着いた雰囲気の中で学校生活が送られていると思われる。また、生徒と教職員の関係についても、おおむね信頼関係が築けていると考える。
課　題	・多数の生徒が平穏で落ち着いた学校生活をおくれている一方で、依然としてコロナ禍の続くなか、配慮や支援を必要とする生徒の数は増加傾向にある。生徒による学校評価項目「2 あなたはホームルームで良好な人間関係を築くことができていますか」について「あまりそう思わない」「そう思わない」の回答をした生徒は 6.2%、「5 学校はいじめや差別を許させない環境づくりに努めていると思いますか」について「あまりそう思わない」「そう思わない」の回答をした生徒は 13.3%、令和３年度よりも数値は微減しているが、配慮や支援を必要としている生徒の存在を示すものととらえたい。 ・ＳＮＳ関連については、入学当初から生徒に対策や注意喚起を促す必要があり、指導の場面を多く設定して、繰り返し注意・指導することが肝要である。
改善策	・誰もが安心して安全に気持ちよく過ごせる学校づくりを目指し、教職員と生徒、また生徒同士のコミュニケーションをとることのできる場面・時間の設定を増加させ、保護者や地域との連携・協力を強化して生徒情報の共有につとめて組織としての対応をすすめていく。 ・SNS 関連の諸課題に対処するための学習会の開催等教育機会の設置を検討していく。

■進路指導の状況

（関連アンケート番号：教職員 10、生徒 6、保護者 6）

進路指導部

取　組	・生徒の主体的進路選択・決定能力の育成を促した。 ・３年間を見通したキャリア教育を推進した。 ・新型コロナ感染拡大下における生徒の状況把握、進路支援のために個人面談を通して適切な指導を心がけた。 ・教職員が意欲を持って進路指導に取り組める組織運営ができるように、関係各所との連携も含めて改善を図った。 ・上記の目標達成のため以下のような具体的取り組みを行った。 ○教職員向けの研修会を実施した。（模試等のデータ分析・研究） ○外部機関の情報を精査し保護者への情報提供を充実させた。 特に共通テスト３年目となった３学年においては最新情報を伝えるよう心がけた。 ○夏期休業中や冬期休業中に補習・講習を実施し学力の底上げを図った。 ○学年や各教科との連絡、連携の強化、情報の共有を行った。 ○自習室の利用促進を図り、環境整備を行った。その結果、多くの生徒が利用していた。 ○廊下の掲示板を活用し、情報を発信した。	
成　果	・生徒評価項目「6　あなたは進路説明会等で進路に関する情報を十分に理解できましたか」についても 83.8%の生徒が肯定的回答を示した。（集計表３ページ）この項目は新型コロナが収束しない状況下において、進路行事が制限される中でも高い水準を維持できている。この数値は学年が上がるごとに上昇しており、指導の成果が表れていると考えられる。 ・保護者評価項目「6　進路希望に応じた情報の提供があり、適切な指導が行われていると思いますか」についても 75.6%の保護者が肯定的回答を示している（集計表６ページ）。この項目においても生徒評価と同様に高い水準を維持している。 ・教職員による学校評価項目「10　生徒の希望する進路の実現に向けて、学校全体として適切に取り組んでいる」について、の肯定的回答が 87.7%となり（集計表１ページ）、かなり高い評価となっている。進学指導重点校としての指導を学校組織で取り組むという意識を高く維持することができている。	

課　題	・進路指導部と学年、学年に所属していない職員との連携をさらに綿密にしていく必要があると思われる。 ・各教科との学習支援システムを構築し、幅広い進路選択が可能になるよう働きかける。	
改善策	・教職員が意欲を持って進路指導に取り組める組織運営ができるように、関係各所との連携や積極的な情報提供も含めて改善を図っていく。 令和２年度より始めた学年サポートシステムをさらに活用する。 ・生徒の興味・関心を広げることができるよう、教科横断的な学習を構築する。ICT 機器の活用を促す。 ・生徒たちが自らもう一段高いレベルの目標をもち、生徒の能力が一段と引き出されるよう、教員は全国の高校の成功事例を研究するなど、大学レベルでの研修や研究をも取り入れて実践に結びつける必要がある。	

□保健指導及び環境美化の状況

保健指導の状況（関連アンケート番号：教職員 11、生徒 7、保護者 7）

生活・保健部（保健環境部）

取　組	・保健調査票や健康診断の結果から生徒の健康状態を把握し、学校生活を送る上で適切な対応が出来るように努めた。 ・新型コロナウイルス感染症拡大防止のために校内の消毒、検温による生徒の健康状態の管理や手指消毒の管理を行った。また、保健だよりでの健康指導を行い、健康管理の大切さをなど感染予防の意識付けを行った。 ・学校薬剤師と連携し、水道水、プール水、教室の照度・CO_2濃度・浮遊粉塵などの検査を行い、学習環境の改善に取り組んだ。また、空気の検査を例年より多く行い教室内の換気状態を確認した。 ・日常の保健室での対応時には、常に感染症に気をつけながら対応を行い防止に努めた。

成　果	・教職員による学校評価目標「11　学校保健計画に沿って生徒の健康管理を適切に行い、また生徒の健康に対する意識を喚起している」で「十分に実現できている」と「おおむね実現できている」を合わせた数値は 96.9%、生徒による学校評価目標「7　学校は生徒の健康管理について適切な指導をしていると思いますか」について「そう思う」「ややそう思う」を合わせると 87.0%、保護者による学校評価項目「7　生徒の健康に関する適切な指導が行われていると思いますか」について「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると 83.1%となり評価は高い水準にあるが、引続き維持できるように努める。
課　題	・教職員による学校評価項目「11　学校保健計画に沿って生徒の健康管理を適切に行い、また生徒の健康に対する意識を喚起している」では令和 3 年度が 91.8%　令和 4 年度が 96.9%である。保護者による学校評価項目「7　生徒の健康に関する適切な指導が行われていると思いますか」では、令和 3 年度が 89.6%、令和 4 年度が 83.1%、また、生徒の「学校は生徒の健康管理について適切な指導をしていると思いますか」では令和 3 年度が 87.4%、令和 4 年度が 87.0%と生徒と保護者の結果が高い水準で推移している。新型コロナウイルス感染症による健康への意識が高まっていると感じられる。しかしながら、感染症への対策は、学校・生徒・保護者全てが協力し合っていく必要がある。
改善策	・これまでの取り組みを引き続き行い消毒や健康観察などの感染症対策を行っていく。クラスや教科指導、部活など学校全体で共通した対策を行い注意・換気を行っていく。また、保健だよりによる集団指導や、来室時の個別指導などを通して、健康課題を踏まえた指導を行う。 ・学校環境衛生は、学校薬剤師と連携し、生徒や保護者に結果と取り組みを広くアナウンスする。 ・保護者が学校の保健指導に関する取り組みをよりよく理解できるよう努力する。

環境美化の状況（関連アンケート番号：教職員 12、生徒 8、保護者 8）

生活・保健部（保健環境部）

取　組	・毎日の清掃を全生徒・職員で分担して行った。ごみの回収については、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため教室からごみ箱を撤去し、持ち帰りの徹底を行った。 ・清掃用具の点検を保健美化委員の生徒と一緒に行い、大掃除の際に用具の交換補充を行った。 ・大掃除の際に洗剤、スポンジ、雑巾などの貸し出しを行いより細かい部分の掃除ができるようにした。 ・清掃業者に委託をし、全校舎のワックスがけを行った。 ・体育館やホールなどの広い場所についてはダスキンの委託をし、簡易に清掃ができるようにした。 ・カーテンの点検補充を行い整備に努めた。
成　果	・教職員による学校評価項目「12　資源リサイクルなど省エネ行動に学校として適切に取り組んでいる」で「十分実現できている」と「おおむね実現できている」を合わせた数値は、令和 4 年度 81.6%、生徒による学校評価項目「8　学校は資源リサイクルや環境美化について積極的に取り組んでいますか」で「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると、令和 4 年度 78.8%、保護者による学校評価項目「8　本校は学校環境美化に力を入れ校内の教育環境がきちんと管理されていると思いますか」では「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると、令和 4 年度 85.1%である。全体としては、令和 3 年度同様、取組が理解され実行されていると思われる。
課　題	・全体的な評価結果としては、教職員、保護者ともに 80%を超えおおむね理解されていると思われる。しかし、生徒による学校評価項目「8 学校は資源リサイクルや環境美化について積極的に取り組んでいますか」で「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると、令和 3 年度 76.6%、であり、これは昨年に引き続き教室からごみ箱を撤去したことにより生徒自身がごみの分別などに関わらなかったため資源リサイクルや環境美化に取り組んでいる意識がなかったのではないかと考えられる。現在は、ごみの持ち帰りの徹底を図れるよう継続的な指導が必要であると感じられる。
改善策	・毎日の清掃活動の充実をはかる。特に生徒美化委員会の自主的活動を促し、学校全体で美化活動を推進する。 ・ごみの持ち帰りの徹底を図る。 ・適切な清掃用具の購入と管理を推進する。

4　いじめへの対応に関する項目

■いじめへの対応

（関連アンケート番号：教職員 28、生徒 5）

生活・保健指導部

取　組	・前年度までと同様に、校内にいじめ防止対策委員会を設置し、活動した。※(管理職、生活保健部主任、特別支援教育委員会、学年主任、養護教諭の計９名で構成) ・本校の「いじめ防止基本方針」(平成 30 年２月)に沿って活動を展開してきた。 ・昨年度と同様にいじめ未然防止・いじめに関する問題意識の醸成を目的とする「いじめ防止プログラム」と称するワークショップ（実施時期は学年ごとに定める。学級単位）を実施した。 ・年間活動計画に沿って、教員間で細目に連携をとり生徒個々の状況の把握につとめた。また月初めの掲示物を利用して、主に学級担任を通じて頻繁な声かけ指導をおこなった。 ・12 月に全市統一の「いじめ解決のための生活アンケート」を実施していじめ防止対策委員会で速やかに集計・分析、全職員でアンケートの結果および分析を共有した。 ・１学年・２学年では学年所属教員・学年サポート教員の協力により、全学年生徒と面談指導を実施する機会を設けることができた。 ・いじめ防止対策委員会を定期的（毎月１回）に開催し、生徒の状況把握に努めた。
成　果	・教職員による学校評価項目「28 いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止や早期発見、早期解決に組織的に取り組んでいる」について「十分に実現できている」「おおむね実現できている」の回答は 95.4%の評価となった。また、生徒の学校評価項目「5 学校はいじめや差別を許さない環境作りに努めていると思いますか」について、「そう思う」「ややそう思う」の回答は 86.8%となった。この数値は微増ながら年々上昇の傾向にある。 ・毎月のいじめ防止対策委員会を中心に、学級担任・学年職員・生活指導部が連携して、いじめの早期発見に努めて迅速な対応をとることができている。

課　題	・生徒の学校評価項目「5 学校はいじめや差別を許さない環境作りに努めていると思いますか」について、「あまりそう思わない」「そう思わない」の否定的な回答が 13.3%あった。令和 3 年度の 13.6%より微減となったが、引き続きいじめや差別を許さない環境づくりを目指すべく、学級活動・授業・生徒会活動など様々な場面において、いじめに繋がるような動きを見逃さずに早期に組織的に動く体制を構築することが肝要である。
改善策	・日常的に生活保健部との連携を密にして、月間の生活目標・いじめ防止標語を有効に活用して、生徒の意欲向上や人権意識の醸成に役立てる。 ・教育相談(個人面談)を通じて、生徒に寄り添いながら悩みや相談に応じられる体制を、今後も大切にしていくことが重要である。 ・保健室やスクールカウンセラーからの得られる個別の情報も、取り扱いに注意しながら活用していく。 ・対応を必要とする個別の問題が発生した際には、いじめ防止対策委員会を中心に教職員で迅速かつ正確な情報共有をおこない、適切に対処していくことが必要である。

3　学校経営の状況

（1）学校の管理運営等の状況

□教育目標等の設定・実施状況

（関連アンケート番号：教職員 13,14、生徒 10、保護者 3）

管理職

取　組	・進学指導重点校として、生徒・保護者の進路希望を実現できるよう、進路指導の充実を図るとともに、授業見学週間と授業改善研修会を実施し、職員全体での授業改善に取り組んだ。 ・学校行事・学級活動や部活動など、生徒の教科学習以外の面でも充実した学校生活となるよう、指導計画・実施を工夫した。 ・桜 ESD 委員会では、主体的・対話的で深い学びを実現するための探究学習を計画的に取り組んだ。 ・英語の４技能検定を測る英語検定を３学年全員に実施。多面的・総合的評価への対応として学習支援システム「Classi」、「さくら手帳」を全学年に導入し成果を上げている ・GIGA スクール構想に基づき、BYOD 端末を駆使し、ハード面とソフト面でコロナ禍のオンライン授業に対応した。
成　果	・「教職員による学校評価項目 13」において、「学校教育目標」に関し 80.0%の肯定的回答を得た（集計表１ページ）。このことは、大多数の職員が学校経営方針を理解し、目標の実現に向け日々の業務に取り組んでいると考えられる。 ・「生徒による学校評価項目 10」および「保護者による学校評価項目３」のデータでは、「そう思う」「ややそう思う」の数値がそれぞれ 78.8%、92.2%という若干の低下はあるものの高評価を維持している（集計表３、11 ページ）。生徒が良好な人間関係を築き、学習面以外でも充実した学校生活を送っており、それを保護者も理解していることが見てとれる。
課　題	・「教職員による学校評価項目 14」における「全く実現できていない」が令和４年度は０%になった。「…教職員が協力して円滑な学校経営」の割合を引き続き維持することに努める。 ・「生徒による学校評価項目 10」の問いに対し、否定的な回答をしている生徒が 21.2%と令和３年度よりも上昇している。生徒・保護者の多様化しているニーズを精査し、具体策を練ることが重要である。 ・クロムブックの効率的な使用及び ICT 支援員との協働を再考し、令和４年度に行った学習会をさらに発展させ、ICT 機器の効果的な運用を目指していく必要がある。

改善策	・様々な研修や会議を通じて職員間の円滑なコミュニケーションを図り、全職員がチーム一体となって学校を運営していく体制作りをする。 ・学年団や生活指導部、部活動顧問等を中心に、全職員がカウンセリングマインドを持って生徒に向き合い、適切に対応する。 ・学校評価やその他の生徒によるアンケート結果を分析し、その内容について、授業改善、部活動の在り方などの課題を職員全体で共有し、具体的な取組を各部署で行っていく。 ・GIGA スクール構想に対応するために、ICT 支援員と協働しクロムブック活用の研修会のような機会を幅広く設け、IT 機器の習熟度の底上げを目指す。

■組織運営及び教職員研修の状況

（関連アンケート番号：教職員 15,16,17,18）

管理職

取　組	・各分掌、学年の主任及び主幹教諭によって構成される運営委員会において、本校の様々な課題や問題点を議論した。 ・教職員研修では、クロムブック端末を使用した授業展開について、本校教職員の先進事例の発表と協議、ICT 支援員による効率的な授業事例の紹介を通して、体験及び質疑応答を行った。 ・令和４年度は校内授業見学週間を設定するとともに、教科ごとに岩崎中学校との相互授業見学を行い、評価の研究と授業力の向上を図った。
成　果	・「教職員による学校評価項目 18」では肯定的回答が 75.4%であり、令和３年度より微減であるが、水準を維持している。 ・「学校グランドデザイン」を基盤にして、本校に課された「進学指導重点校」としての使命や「桜丘らしさ」「学校の強み・弱み」といった議論を行うことができた。 ・メンターチームと企画研究部の取り組みに若手、中堅教員も加わり、これまでの経験に囚われることなく、積極的に新しい手法を授業や学級経営に取り入れて行こうとする姿勢と人材育成の観点が芽生えてきている。

課　題	・本校の現段階における全ての課題や問題点について議論を尽くすことはできなかった。また、議論の成果を全体に浸透させる方策については課題を残すこととなった。 ・「働き方改革」の観点から、効率的学校運営に取り組み始めた。多忙な日常業務の中で業務の見直しを図り、更なる学習活動の充実を目指し、評価項目 17 の「職員会議等」について、肯定的な回答が 69.2%と横ばいであった。負担が増えた業務もあり、より一層の改善に向けた努力が必要である。
改善策	・全職員が同じ方向性を持って日常の業務に当たり、共通ビジョンをもって将来像を描くことができるための方策を研究する。 ・職員の授業力向上、研修機会増加を目指し、業務の精選、時間短縮、効率化を図る工夫が必要である。 ・働き方改革の観点からも、職員の働きやすい環境づくり、日常業務の軽減化に取り組む。 ・各分掌・学年等の取組状況が、全職員で共有できるような「見える化」が必要であり、問題点を共有し全体で解決していく必要がある。

運営委員会　（関連アンケート番号：教職員 17）

取　組	・職員会議日に、生徒を完全下校させ、放課後の活動をより充実させる。
成　果	・職員会議後の時間に余裕が生まれた。
課　題	・評価項目 17 の「職員会議等」について、肯定的な回答が 69.2%と横ばいであった。負担が増えた業務もあり、より一層の改善に向けた努力が必要である。
改善策	・午前の授業の日を設け、会議日を設定できるようにする。

企画研究部　（関連アンケート番号：教職員 18）

取　組	・教職員研修について、進学指導重点校推進のための業務として、次の4つの取り組みを行った。 ・授業見学月間の設定 ・岩崎中学校との交流による研修 ・授業力向上研修 ・メンター研修

成　果	・研修・研究に関する項目について十分できている・概ねできているとした回答は、令和２年度は 83.3%、令和３年度は 81.6%、令和４年度は 75.4%と減少している。だだ、全く実現できていないとする回答は、令和２年度は 2.1%、令和３年度は 6.1%、令和４年度は 1.5%と減少した。 ・岩崎中との交流は各教科に日程を調整して行うという形式にしたところ、全体で行うよりもいい内容で行えた教科もあれば、日程調整が出来なかった教科もあるなど温度差が生まれてしまった。 ・授業力向上研修、メンターチームによる研修については、人材育成マネジメント研修等該当教員により企画・実施され、２回行われた。初任～５年目、臨任等を対象にミドル、ベテラン教員を交え、様々なテーマで意見交換をすることで有意義な研修であった。
課　題	・研究研修がまだ十分に実現できていないと感じている教員が２割強程度いる。 ・授業見学に関しては、期間を長めに設定することで、より多くの教員が互いの授業を見学する機会を増やしたが、それほど大きな成果があったとは言えない。 ・校務スケジュールの過密さから、なかなか最適な日時を探すことができなかった。
改善策	・学校行事作成の段階で校務スケジュールを確認し、また、教員がどのような内容の研究・研修を期待しているかを調査し、早めに研修の実施に向けた計画を策定する。

１学年　（関連アンケート番号：教職員 16）

取　組	・自主自立(自律)の精神を養い、高校生としての自覚のもとで責任ある行動がとれるように指導する。 ・進学指導重点校として、潜在能力を開発し、高い学力を育てる。 ・高校時代の諸活動を通して、豊かな人間性や社会に出て必要とされる力を育む。

成　果	・教職員による学校評価項目「16 各学年の運営は、情報が共有され組織的取組が円滑に行なわれている」については、肯定的回答が約 80%と比較的高い数値となっている。学年職員はもちろん、学年サポート職員の協力もあり、目の前の課題に対して丁寧に取り組むことができた。 ・生徒による学校評価項目「2.HR で良好な人間関係」「4.不安や悩み相談」「5.いじめに対する姿勢」についての項目は、それぞれ肯定的な回答が 90%近くある。夏休み明けの教育相談や面談等を含めた対応の成果があると考えられる。今後も継続していきたい。
課　題	・生徒による学校評価項目「3. 生徒会活動や委員会活動を主体的」「6.進路に関する情報を十分に理解」「9.総合的な探求時間に主体的」において否定的な回答が約 20%となっている。生徒会活動、進路、探究活動に前向きに取り組む姿勢のサポート・支援の必要性がある。
改善策	・各行事に向かう姿勢や探究活動の指導や支援方法を検討し、こまめな声かけを実施する。 ・希望進路実現に向けた意識をもてるよう継続的に指導をしていく。

２学年　（関連アンケート番号：教職員 16）

取　組	・自主自立(自律)の精神を養い、高校生としての自覚のもとで責任ある行動がとれるように指導する。 ・進学指導重点校として、潜在能力を開発し、高い学力を育てる。 ・高校時代の諸活動を通して、豊かな人間性や社会に出て必要とされる力を育む。
成　果	・教職員による学校評価項目「16 各学年の運営は、情報が共有され組織的取組が円滑に行なわれている」については、肯定的回答が約 80%と比較的高い数値となっている。学年職員はもちろん、学年サポート職員の協力もあり、目の前の課題に対して丁寧に取り組むことができた。 ・生徒による学校評価項目「2.HR で良好な人間関係」「4.不安や悩み相談」「5.いじめに対する姿勢」についての項目は、それぞれ肯定的な回答が 85%以上ある。面談や教育相談、さらには一人３分程度の「生活相談」等の対応を行ってきた成果があると考えられる。今後も継続していきたい。

課　題	・教職員による学校評価項目「17　会議は効率的に運営されており、教育活動や学校運営の計画等の共通理解が図られる場となっている」「15 一人ひとりの教職員が意欲をもって業務に取り組むことができる組織である」についての、否定的回答がどちらも25%以上を示している。約1/4以上の教職員が意欲をもって業務に取り組むことや共通理解に関して否定的に感じていることから、この点を改善するためにも、校内に導入されているクラッシーやグーグルを上手に活用したり、日常生活の中での会話等を通して教員間のコミュニケーションを図り、情報の共有を図っていくことが課題である。
改善策	・学年の情報を適切に発信し、全職員で共有することをさらに促進し、学校として全生徒を支えていく体制を強化していく。 ・報告・連絡・相談を着実に行い、みんなで協力しながら誰もが気持ちよく仕事に取り組める雰囲気づくりを意識しながら行動していきたいと考える。

３学年　（関連アンケート番号：教職員 16）

取　組	・自主自立(自律)の精神を養い、高校生としての自覚のもとで責任ある行動がとれるように指導する。 ・進学指導重点校として、潜在能力を開発し、高い学力を育てる。 ・高校時代の諸活動を通して、豊かな人間性や社会に出て必要とされる力を育む。
成　果	・令和３年度の課題であった、「１　進学指導重点校としての取り組み」を伝えていくという点であるが、保護者からの肯定的な評価が約６５％となり、前年度と比較して改善がみられた。３年生となり、具体的な進路決定に関する活動が増加したことも影響していると考えられるが、それに加えて学年全体での取り組みが評価された結果である。 ・生徒アンケート No.2「ホームルームでの人間関係」については実に９５％の生徒が肯定的な回答をしていて、担任をはじめ学年全体の雰囲気づくりが安心・安全な居場所であることにつながったといえる。 ・３年ぶりに開催となった文化祭に関する活動を通して試行錯誤のプロセスを経験することができた。それぞれのクラスの特色が表れた企画を実施することができた。 ・「受験は団体戦」を合言葉に学年全体で一致団結を図った。始業前や放課後に自習室を利用し、最後まであきらめずに自らの目標に向かって努力する生徒が多くいた。

課　題	・コロナ禍の影響を大きく受けた３年間であった。入学直後の休校期間や分散登校など、通常のスタートが切れなかった部分で、教師と生徒の関係づくりや規範意識の構築が難しかった。
改善策	・適切な距離感で「寄り添い、励ます」ことが重要となると感じている。 ・学年職員がまとまることが必要不可欠である。

□学校経理、施設・設備及び情報の管理状況

（関連アンケート番号：教職員 19,20,21,22、生徒 11,12、保護者 9）

予算委員会（総務＋事務）

取　組	・要望した予算に対する、物品注文や支払いを事務で一括して行えるようにした。
成　果	・事務職員が注文などを行ってくれるようになり、各部署の負担が減少した。 ・職員評価項目 19-「予算編成」、20-「会計報告」の肯定的な回答が 98.5%、100%である。また、保護者評価項目 9-「各種会計報告が適切に行われていると思いますか」の肯定的な回答を 96.6%と高い数値である。 ・学校施設に関する、職員評価項目 21、生徒評価項目 11、の肯定的な回答が 83.2%、69.8%と高い数値であるが、若干生徒の評価が低い。 ・個人情報に関する、職員評価項目 22、生徒評価項目 12、の肯定的な回答が 95.3%、93.1%と高い数値である。
課　題	・予算確定後に商品の値上がりが起こり、予算使用の一部変更を行った、 ・伝票が一部変更になったため、事務への問い合わせが増えた。 ・施設面の老朽化が進み、維持管理費も増加している。
改善策	・予算や個人情報の取扱いに関してはこのままの状況を維持する・ ・施設面に関しては、学校予算も限られているので、市に要望できる修繕費を計上していく。

3　学校経営の状況

（２）保護者・地域等との連携協力の状況

■保護者・地域等との連携協力の状況

（関連アンケート番号：教職員 23, 24、生徒 14、保護者 10）

管理職

取　組	・本校の特色である社会貢献活動として、学園通りコンサートは再開を果たした。引続き保土ヶ谷公園清掃・がやっこレスキューなど中止となっている行事について、関係機関と引き続き連携をはかった。 ・地域の小・中学校と連携を密に取り、「教員養成講座」への支援、将来的な学校行事へのサポートや、教員相互授業見学により、協力体制を構築することに取り組んだ。 ・文化祭等の多くの学校行事が再開したが、制限下の実施であった。保護者・地域の方が積極的に参加できるよう、環境整備に取り組んでいきたい。また台風等の自然災害時に対応できるように日頃より協力体制を築きたい。
成　果	・例年 10 月と２月に近隣の幼稚園、小学校、中学校と合同開催している「学園通りコンサート」を３年ぶりに実施。令和５年度に向けて引き続き連携を図っていきたい。 ・教職員の評価項目「23　PTA との連携・協力推進」については、肯定的な回答が 93.8%となっており、令和３年度より，さらに数値が上昇している。PTA の活動も活発である。 ・教職員の評価項目「24 学校の教育活動の情報提供・説明が十分になされ、活動に対する理解が得られている」については、肯定的な回答が 90.7%となっている。ICT 機器等を活用した改善を実感してるが、同様の項目である「保護者 10」や「生徒 14」ではそれぞれ 83.7%と 81.2%となっており高い数値を維持している。更なる需要に応えていきたい。
課　題	・登下校時の歩き方やバス乗車時のマナーの悪さを地域住民から指摘される事例があった。 ・さまざまな学校行事を再開したが、制限を設けており、今後の地域との連携の継続が課題である。 ・式典や PTA 行事も縮小や変更が多くあり、今後の展開について検討をする必要がある。
改善策	・生徒の登下校時のマナー向上に向け、生徒保健部を中心に引き続き注意喚起を促す。 ・地域・保護者との更なる信頼関係の深化を目指し、より丁寧な学校の情報発信をさらに充実させる必要がある。

総務部

取　組	・例年行っている地域との連携活動が、コロナ感染症対策によりすべて中止となってしまった。 ・桜高祭(文化祭)など本校の広報をする機会もすべて中止となった。 ・学校ホームページを利用し、学校の取り組みを紹介した。
成　果	・令和４年度の職員アンケート結果では、項目 23「ＰＴＡとの連携・協力の推進が図られている」では 93.8%、項目 24「学校の教育活動の情報提供・説明が十分になされ、活動に対する理解が得られている」では 90.7%、生徒項目 14「学校は学校ホームページ及び学年便り等を活用し、保護者の必要な情報を提供していますか」では 81.2%、保護者項目 10「学校の様子を家庭への配布資料や学校ホームページなどを通じて十分かつ適切に伝えていると思いますか」では 83.7%が良い評価であり、例年同様高い数値であり、取り組みが良い方向に向いていると言える。
課　題	・ICT 関連の技術は日々変化しているが、それに対するスキルが追いつかない状態になっている。保護者や生徒、中学生は企業などが作成している Web ページと学校を対比する場合もあるのでコンテンツの内容を充実させることが難しい。
改善策	・ICT 関連の技術に関しては、ICT 支援員と協力し新しい技術を上手に取り入れ、さらに充実させる。

□危機管理の状況

（関連アンケート番号：教職員 25,26、生徒 13）

防災委員会

取　組	・１回の避難訓練の内容・運営の充実をはかった。 ・エリア別集団下校班・学校留め置き班の名簿を作成した。 ・令和４年度は、全校生徒での避難訓練を感染対策徹底の上で実施した。担当教職員及び生徒による校内避難経路の確認や下校する集団の顔合わせ・確認を行い、非常時の際には各エリアの班長を中心に、迅速に行動することを確認した。
成　果	・教職員の学校評価項目「25 学校安全計画に沿って適正に実施されている」・「26　学校防災計画に沿って、緊急避難場所や避難経路・避難方法等の周知徹底がなされている」について、「十分に実現できている」「おおむね実現できている」の回答が約 95%と高い評価結果となった。 ・生徒の学校評価項目「13　あなたは災害時の避難経路を知っていますか」については、理解していない生徒の割合が３学年全体で 32.3%となり、昨年度の 37.2%よりも災害時の危機管理の意識が少し高まったが、まだ満足できる水準にない結果となった。

課　題	・防災意識の向上と避難経路の確認を徹底することが課題である。 ・留め置き希望生徒の待機場所の確保、水や食料の確保について、防災委員会の検討課題とする。
改善策	・教職員研修で、防災意識の向上・避難経路の確認（校内及びエリア別）を徹底する。 ・入学年度の学級での避難経路の確認と指導の徹底は特に重要である。 ・エリア別集会での下校経路確認と指導の徹底をはかる。また、各家庭内で、保護者との連絡経路の確認についても話す機会を設ける。 ・年２回の防災訓練で、内容を充実したものにしていく。

□学校に関する情報公開の管理状況

（関連アンケート番号：教職員 27、生徒 14、保護者 10）

総務部

取　組	・学校ホームページを通して、様ざまな情報発信を行っている。また、保護者や生徒向けにはクラッシーや一斉メール配信などを利用し、発信を行っている。令和４年度では、グーグルクラスルームの活用をよりおこない、始業式や終業式、探究の時間の発表、各授業クラスでの配信などを行った ・学校説明会の参加者を横浜市のシステムを使い、インターネット申し込みを行った。
成　果	・令和４年度データで、職員 27「募集に関する学校説明会や学校情報に関する広報活動が適切に行われている」は 95.4%、生徒 14「学校は学校ホームページ及び学年便り等を活用し、保護者の必要な情報を提供していますか」は 81.2%、保護者 10「学校の様子を家庭への配布資料や学校ホームページなどを通じて十分かつ適切に伝えていると思いますか」は 83.7%が良い評価をしている。 この評価は例年通りの数値である。
課　題	・インターネットでの発信技術は日々変化しているが、それに対するスキルが追いつかない状態になっている。 令和４年度は学校ホームページのトップ画面の変更を行ったが、全面的な変更を行うには時間や技術が足りない。 保護者や生徒、中学生は企業などが作成している Web ページと学校を対比する場合もあるのでコンテンツの内容を充実させることが難しい。 ・横浜市の電子申請システムがリニューアルしたため、令和３年度に使用していたコンテンツが利用できなくなった。

改善策	・例年高い評価を受けているが、少しずつでも新しい外部に対して発信するWebページに関しては、新しい技術を上手に取り入れ、さらに充実させる。 ・ＩＣＴ支援員との連携を図り、新しい技術の導入を行う。

4　いじめへの対応に関する項目

■いじめへの対応

（関連アンケート番号：教職員 28、生徒 5）

生活・保健指導部

取　組	・前年度までと同様に、校内にいじめ防止対策委員会を設置し、活動した。※(管理職、生活保健部主任、特別支援教育委員会、学年主任、養護教諭の計９名で構成) ・本校の「いじめ防止基本方針」(平成 30 年２月)に沿って活動を展開してきた。 ・昨年度と同様にいじめ未然防止・いじめに関する問題意識の醸成を目的とする「いじめ防止プログラム」と称するワークショップ（実施時期は学年ごとに定める。学級単位）を実施した。 ・年間活動計画に沿って、教員間で細目に連携をとり生徒個々の状況の把握につとめた。また月初めの掲示物を利用して、主に学級担任を通じて頻繁な声かけ指導をおこなった。 ・12 月に全市統一の「いじめ解決のための生活アンケート」を実施していじめ防止対策委員会で速やかに集計・分析、全職員でアンケートの結果および分析を共有した。 ・１学年・２学年では学年所属教員・学年サポート教員の協力により、全学年生徒と面談指導を実施する機会を設けることができた。 ・いじめ防止対策委員会を定期的（毎月１回）に開催し、生徒の状況把握に努めた。
成　果	・教職員による学校評価項目「28 いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止や早期発見、早期解決に組織的に取り組んでいる」について「十分に実現できている」「おおむね実現できている」の回答は 95.4%の評価となった。また、生徒の学校評価項目「5 学校はいじめや差別を許さない環境作りに努めていると思いますか」について、「そう思う」「ややそう思う」の回答は 86.8%となった。この数値は微増ながら年々上昇の傾向にある。 ・毎月のいじめ防止対策委員会を中心に、学級担任・学年職員・生活指導部が連携して、いじめの早期発見に努めて迅速な対応をとることができている。

課　題	・生徒の学校評価項目「5 学校はいじめや差別を許さない環境作りに努めていると思いますか」について、「あまりそう思わない」「そう思わない」の否定的な回答が 13.3%あった。令和 3 年度の 13.6%より微減となったが、引き続きいじめや差別を許さない環境づくりを目指すべく、学級活動・授業・生徒会活動など様々な場面において、いじめに繋がるような動きを見逃さずに早期に組織的に動く体制を構築することが肝要である。
改善策	・日常的に生活保健部との連携を密にして、月間の生活目標・いじめ防止標語を有効に活用して、生徒の意欲向上や人権意識の醸成に役立てる。 ・教育相談(個人面談)を通じて、生徒に寄り添いながら悩みや相談に応じられる体制を、今後も大切にしていくことが重要である。 ・保健室やスクールカウンセラーからの得られる個別の情報も、取り扱いに注意しながら活用していく。 ・対応を必要とする個別の問題が発生した際には、いじめ防止対策委員会を中心に教職員で迅速かつ正確な情報共有をおこない、適切に対処していくことが必要である。